

浄土

二月号

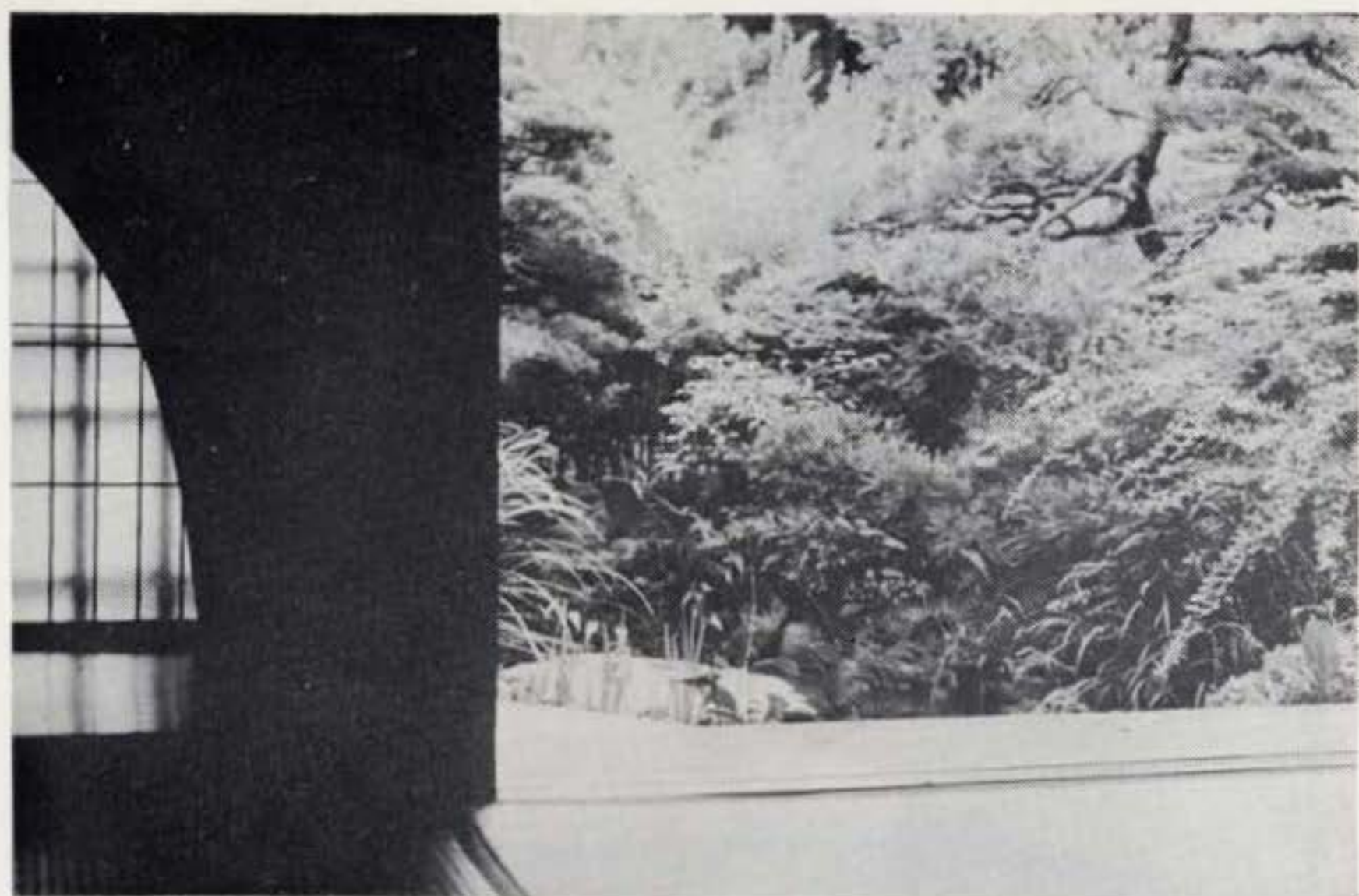


法然上人鑽仰会

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別扱承認雑誌第三五二号）
昭和四十五年一月二十五日印刷 昭和四十五年二月一日発行

第三十六卷

第二号



—目 次—

表紙「初雪」松濤達文画

鑽仰法然上人—宗教における純粹性—	仁戸田 六三郎	…… (2)
「浄土」創立三十五周年記念の集い		…… (6)
一枚起請文と浄土信仰(下)	香 月 乗 光	…… (8)
お念仏の現世利益	川 内 知 光	…… (12)
ありがたいお経・めでたいお経	須 藤 隆 仙	…… (15)
聖典解説「小消息」の御法語に学ぶ②	小 沢 勇 貫	…… (18)
念仏生活 五重相伝のお話し②	藤 井 実 応	…… (21)
お地蔵さまの頭は何故円い(下)	川 上 法 俊	…… (26)
聖典物語 カピラ城の滅亡②	つるたたんせん	…… (29)
宝物シリーズ② 高野山金剛三昧院多宝塔		…… (32)

2月



今月のことば

ねはんの心

「満目荒涼」という言葉のピッタリする季節となった。地表のあらゆるものは霜枯れ、木々の枝は葉をすべてふるいおとし、山は深ぶかと雪をかぶり、ひっそりと、息をひそめて春を待っている。自然の天地は森閑として、空を飛ぶ鳥さえ、その羽音をひそめているようである。——そのようななかで、いたずらにさわがしいのは、ただ、人間の世界のみである。

本月十五日は「ねはん会」——釈尊が八十才の生涯をクシナガラ城外の、沙羅双樹のもとで静かにおえられた日である。「涅槃」とは「永遠の寂靜」である。人間として八十年間、この地上に生きて来られた釈尊の体内に点じていたいのちの炎が、音もなく吹き消された、その瞬間、釈尊の「さとり」が永遠の真理の光明として、われわれのあいだに輝きでたことを意味する。その光明はいかなるものによっても吹き消されることのない、寂然不動の灯である。

海面にいくら嵐が吹き荒れようと、海底の深みにあつてはいささかの動揺もなく、無窮の時間が刻まれている。本年もまた、われわれがむかえるであろう幾多の激動は、海面に泡立つ波浪のごとく、われわれの生活を、社会を、その巨大なる力によって揺り動かすことであろう。しかし、仏者として生きるわれわれにとって、かかる波浪の一々に、恐れ、おののき、浮き、沈むことは意味のないことである。仏者たるものは、釈尊の「ねはんの心」を帯して、世のうわべにおこるうたかたのごとき事象に左右されることなく、永遠の真理を求めて、寂然不動たるべきである。それは丁度、いま、窓外に眺められる二月の風光のごとく、来るべき春の跳躍にそなえて、静かでありたいものである。

(竹中)

鑽仰法然上人

—宗教における純粹性—



仁戸田 六三郎

(早稲田大学教授・文博)

私の専攻分野は食物でいうならばケンチン汁・チャンコ鍋のようなもの、この大東京の人々が各々何をしているか分らないように、とらえどころがなくお話しすることも目的を得ないかも知れませんが、他山の石としていうこともお聞き願えればと思います。

単刀直入ですが、宗教というものは法然上人の線からいかねばならないと思っております。ご存知の通り推古天皇のみに世に仏教が日本に伝えられて以来、今日までに至っておりますが、この日本仏教が花開き実を結んだのは法然上人からである、浄土宗という立場のみでなく私の研究分野の側からみても信じて疑いありません。

数年前奈良薬師寺の高僧と対談いたしました。その折、浄土宗・真宗・日蓮宗・禅宗などは仏教ではない、そられは俗

化した、俗悪の仏教であり、平安末期から鎌倉にかけての仏教は墮落そのものであると聞き大変驚ろかされました。それではあなたはといいますと、毎朝起きると手洗いの掃除をするから墮落していないといっております。またかなり前になりますが、京都妙心寺の塔頭のある高名なお坊さんの話を聞いておりました時、睡気をもよおし本堂の縁先でうつらうつらしていると、何故話しを聞こうとしないのかと問われました。私自身も考える力はないが、あの人のいっていることは自分で考えたことではない、読んで暗記したことをいつているにすぎない、そんな自分の考えでもないことを当り前に話すな、といって相手にされずひがみ根性をもったこともありました。

つまり俗化しない仏教のもっている誇りというものはチリ

や埃の「ほこり」と大同小異であると思います。たとえば、以前高名な浄土真宗の方とNHKの対談での折、その方は奈良・平安期の仏教にかえたいという発言をしました。私は奈良・平安期の仏教はスポンサーつきのものであり、自分の力でやったものではないことを強調し、舌戦をまじえたことがあります。

そうしたことより虎の威を借る狐とでもいいでしょう。どこかで守ってもらう、その方法が問題でしょう。宗教が宗教によって守られるということは必ずしも悪いことではありません。つまり法然上人の開かれた日本の仏教、それはそういう仏教でない何物かによってささえられるものではなく、本当に自前でお開らきになったという点で、日本の宗教の歴史の中で一番まじり気のない純粹なものであると思います。したがって最初から権力とか武力とかに守られていない、そこに法然上人の開かれた浄土宗の宗教としての、仏教としての純粹性をかさねて申し添えたいのです。

そういう気持をもっておられた方は法然上人だけではございません。たとえば道元、歴史を溯れば伝教大師最澄です。最澄は叡山に初めて根本中堂をお造りになられました。それは里にあっては財力・権力・色力などのいろいろな力からの刺激や支配を受けることになる、そこで人里離れた叡山の山

奥にお寺を開かれたのです。ところが最澄がご入滅されたあとの天台宗はどうなったか。特に徳川時代には幕府に追従しております。私はその是非をいうものではありません。天台宗が宗教としての純粹性を失ったのではないかということをお願いいたします。

次に禅宗、これは鎌倉・室町期の日本仏教を代表するもので、はじめは不立文字という立場を示しておりました。ところが室町期になると宗教を逸脱したやり方で論議をかもし出してまいります。更には日蓮は立正安国論などで法然上人を非難しております。日蓮も偉い方に相違ありません。しかしその意図とするところは宗教そのものもありますが、より政治的な線に強い関心があり、この点で宗教の純粹性にいささか欠けるところがあると思います。

ところが法然上人におかれましてはそのようなところは少しもありません。それに関連し、この宗教の純粹性が更に盛り上がり、より積極的に実を結んだ線があります。それはいうまでもなく上品上生ではなく下品下生に向って前向に向っておられたということです。それは龐大な仏典の中から浄土三部經を選択されたという大英断、この線が日本仏教という宗教の純粹さの第一歩であると思います。それらが集約された選択本願念仏集の中で、最高最善の法を最低の人間に施さ

れたということです。

私は小さい頃、この選択本願念仏集を仮名まじりで読ませていただき、じつとくるものを覚えました。大体人間の中で立派な人というものは数少ないものです。逆に箸にも棒にもかからない悪人も少いものです。一番多い人間は可もなし不可もなしという人々でしょう。法然上人はこうした人々の中、最悪の人間、立派でない人間までも含め、そこに弥陀の本願というものを実らせようと考えられたのです。私はこれこそ宗教的にいって純粋なことであると思います。

けだし宗教の純粋性ということのみに終始しましたが、それでは宗教とは何かということになります。人の口に戸は立てられませんからいろいろの表現があるでしょう。私なりのいい方を許していただくならば、一人でも多くの人を救うのが宗教だと思います。偉い人を二、三人救うよりも普通の人を一人でも多く救うのが宗教ではないでしょうか。

そういうところに目をつけられた法然上人は、それには浄土教が一番良いとして、他をすべて割愛し浄土三部経をとられたのです。そして実にその味を濃くして三心に集約し、それは結局南無阿弥陀仏という、唯六字の称名につきるとされました。これは選択集を拝読いたしますと、これらの点が分らないながらも引きつけられるところがあります。こういう

離れ業とも申せるもの、これが法然上人のお持ちになっている偉大さだと思います。

以上申してまいりますと、結局自分の子供をほめているようなものです。鑽仰会の方々が法然上人をほめるのは当たり前、悪くいう人はいないでしょう。ただ私のいいたいことは法然上人の宗教に対する純粋性の偉大さを他の人々に認識してもらいたいということです。そうかねがね思っておりまして、ある日、押入れを整理しておりましてところ古ぼけた本が出てまいりました。それはプロテスタント系神学者カル・バルトの「教会教理学」という書物です。その中「真実の宗教」の項、本日の私のいい方ならば、純粋の宗教というところで、「法然上人の宗教は本当の宗教である」といっております。このヤソ教信者のバルトも偉いでしょう。しかし他の宗教の信者に、そういわせた法然上人はもっと偉いのではないかということになりました。

この意味においても、今や法然上人は世界的な宗教者であると断言しても過言ではないと思います。こうバルトに、いしめたものは何か、それは法然上人のもつ宗教上の純粋性です。独立採算といつては言が強すぎるかも知れませんが、宗教が宗教自身によって存在している、それが法然上人の仏教であると思います。

ではその根拠はどこにあるか。それは人間のもっている業（煩惱）に対して批判的でなく内在的にそれを身に受け、法然上人ご自身が体験されたということではないでしょうか。蟹は甲を見せて穴を掘るので、私は私なりに穴を掘っている訳ですが、たとえば一枚起請文もそうでありましょう。他の子細はないといっております。子細はないということ、裏をかえせば考えはない、唯それだけである、無礙の一道であるといっているところに純粹性があるのです。

何か思うことあって宗教を語る宗教家は非常に多くあります。ところが法然上人には全くありません。ですからそれを拡大解釈することが許されるならば、全ての人間は下品下生である、人間自身の力ではどうにもならない業（煩惱）を背負っている、これらに対する感受性、しかも鋭い姿勢と直感力で人間というものを忌憚なくとらえていらっしゃいます。ただそれが罪人の罪に対し刑罰を課すという意味での鋭さは全然違います。暖か味をもって、人間の弱さ、どうにもならない罪、それをどこまでも追跡されています。この場合でも法然上人は対機説法といわれているように、その説法の相手に合った内容で、しかもご自身との間に全然格差を設けておりません。他の祖始方には多分にエリート意識があると思えますが、このエリートにより栄えた宗教は本来の純粹な意

味での宗教ではないと思います。

私は法然上人の著述を私なりに拝読させていただき、至るところに平等に下品下生のもっている悩み、その荷負っているみにくさ、その中に上人自身その一人として入っておられる、これが選択集をささえている母体の大きな一つであるということを感じて疑いありません。

しかし、この見方は一方ではくだらない人間に妥協し、人間の進歩はない、大体南無阿彌陀仏で人間が救われるのか、そんな簡単なものではないという見方をされるかも知れません。けれど私にいわせれば、こうした見方は宗教的な純粹性がありません。つまり人間の尺度で人間を考え、仏さまの尺度で人間を考えておりません。

法然上人は自分も同罪の一人であると謙虚な面をお持ちです。何故ならば、やはり弥陀の懷にいだかれているところに根本的な立場があるからです。これがいうなれば本当の信仰でしよう。他の考え、他の計いというものはそこにはない。たといだまされたとしても悔はないというところに他力の一つの世界があるのではないのでしょうか。私は日本の仏教史は、純粹な意味において法然上人からはじまるのだということをおかねがね思っている次第でございます。

浄土

創立三十五周年記念の集い

昭和十年、故真野正順先生を中心に、文書伝道・布教活動
を旨として設立された「法然上人鑽仰会」も昨年にて三十五
周年を迎えることとなりました。これを記念すべく関東地区
の僧俗読者のご参集を得て、去る十二月八日午後五時より、
東京芝公園内日本機械振興会館内「藤直」において講演会と
祝賀会が盛大に催されました。

まず、早稲田大学教授仁戸田六三郎博士の「法然上人鑽
仰」と題する、前述のような記念講演は宗門外から見た法然
上人の、求道への真摯な態度、極悪人をもみ仏の国へ導く、
いつに庶民のための、いや宗教に関する純粹性にかけては日
本仏教の出発点であるという、時折博士独特のジョークをま
じえた話しは参会者に深い感銘を与えるにふさわしいもので
ありました。

そして仁戸田博士への二三の質問の後、祝賀会へ。この日
本機械振興会館は東京タワーと道一つ隔てた高台に位置して
おりますが、この日のために準備された同館六階の会場の二
面の窓越しに、一方には霞ヶ関ビルを中心とした官庁街、他

方にはやがて日本一となる世界貿易センタービルを中心に新
橋・銀座、遠くには東京港にうかぶ船舶、それらから点る光
やネオン輝くさまが眼下に一望のもとに眺められ、いやが上
にも崇高の中に進められていきました。そしてご参会の方々
からの祝辞はいずれも今後の会の運営に参考となるあたたか
いお言葉でした。

まず、東京小石川伝通院住職大河内隆弘僧正、宗議会議長
稲岡覚順僧正は、

「初心にかえって、先師の遺徳にはじめよう、また現在の
沈滞ぎみの浄土信仰打破の先鞭となるよう本会の益々の興隆
を望む」

とのはげましのご祝辞。ついで次々に立たれた宗内各方面
にご活躍の方々から、

「法然上人のみ教えはその求道時、開宗時、そしてお亡く
なりになられるまで終始一貫し、変ることなく弥陀信仰の尊
さ、ありがたさを伝えられ、決して飾られることなく客観的
な表現をもってなされた。このご遺徳を鑽仰する本会の発展

を期すために、一人二人の力ではなく多くの人々の力を結集してこそ成し遂げられる故、更に共にがんばりましょう」

との力強いご支援のご祝辞。なかでも遠く長野からこの日のために駆けつけた茅野心光寺住職渋谷賢応師は、

「郵便の遅配で昨日案内をいただきました。返事を出すより本人が行った方が早いからまいりました」

と、ユーモアあるご祝辞。そして多くのご参会をいただいた在家読者の中、東京深川で木材業を営む小柳晟氏は、

「ここ数年来法然上人のみ教えに触れ、強くうたれました。この無理のないみ教えこそ今日のような複雑多岐の世に必要であり、そこにこそ法然上人のみ教えがあります」

また、唯一の女性参会者の原島晨子さんは、

「たまたま手にした『浄土』から信仰のありがたさを知りました。今後は未熟ながら『浄土』と共に歩む生活でありたいと思います」

との体験を通しての生活の一端を披露。祝宴半ばにして立たれた東京浅草瑞泉寺住職一ノ瀬直行師は、

「創立当初、文書伝道に対する批判はきびしく、また弱いものでもありましたが、真野先生を中心に編集責任者の道瀬さん、それに佐賀さんと私の三人で発行し続けました。それにつけても戦時中焦土と化した中、焼失をまぬかれた青山梅

窓院の尖塔の一室を借り事務所として、八方塞りの窮地に追い込まれました中から、なんとしても『浄土』の息だけは残そうとがんばりましたこと、これは忘れられない思い出です。今はかげながら本会の発展を見守らせていただきます」と、本会発展の礎を築かれた頃の思い出を語られ、一瞬参会者の胸を打つ感銘深いものでありました。

こうして三十五周年記念の集いは閉会時間を過ぎるほどに盛会裡に意義あるものとして催すことができました。これを機会に更に発展を期したいと思います。なお当日ご参会の方々の芳名を書き添えておきます。

秋元朝雄 品瀬弘道 大河内隆弘 大谷隆雄

岡本 薫 大久保文雄 稲岡覚順 一瀬直行

小柳 晟 後藤真雄 小橋麟瑞 佐藤 間

佐藤良智 佐藤行信 佐藤成順 柴田敏夫

白石広祐 渋谷賢応 関二三男 増上寺

塚田弘導 竹中信常 中出政司 中原直治

仁戸田六三郎 野村宗春 服部仙順 原口徳正

原島晨子 福島純江 北条浄善 前田成孝

真野竜海 松濤達文 宮林昭彦 村瀬秀雄

望月百万 安居香山 吉田勇之助 長谷川宣丈

(五十音順・敬称略)

一枚起請文と浄土信仰(下)

大正大学女子実践仏教講話より

香 月 乗 光

(仏教大学教授)

安心というものは、初めから具わるというわけにはいきま

せん。阿弥陀さまに救われてそのお浄土に住生するためには、この安心が具わっていないければなりません。それを具えることは、なかなかむづかしいことです。しかし法然上人はひたすらに念仏を称え続けていけば、自ら安心が具わると教えられたのです。どうしてもはじめは本当に阿弥陀さまという仏さまがおられるのか、本当に極楽があるのか、本当に私を救って下さるのか、本当に住生できるのか、というようなさままの疑いが誰しも起ってきます。「疑ひながらも念仏すれば住生す」(「徒然草」)と仰せになって、法然上人はそういう疑いの心があってもよろしいから、念仏せよとお勧めになっております。それは疑いながらも念仏していくうちに、自然にこの疑いが消えていくそして間違いなく阿弥陀仏がましまして、この私を極楽浄土に住生せしめて下さ

るといふ確信ができあがるからです。

ひたすらに念仏を申し続けるといふことになると、寝ている間も称えるのかということになりますが、法然上人は「目の醒めたらんほど、念仏し給へ」(「徒然草」)と仰せになっています。つまり念仏を申しながら眠り、目がさめたならばまた念仏を申すということであれば、念仏を続けることになるということです。また、

人の命は食事の時、むせて死する事も有るなり。南無阿弥陀仏とかみて、南無阿弥陀仏とのみ入るべきなり。(「法然上人行状絵図」第二十一)

とも申されています。念仏をとえながら食事をし、仕事をし、すべて念仏の中に生活を送っていく、これが法然上人の教えです。

こうしてひたすらに念仏を申ししていくうちに、自ら安心



ができあがっていくというのであります。

「皆決定して南無阿弥陀仏にて往生するぞと、おもふうちに」という、思う確信、「疑ひなく、往生するぞと思ひとりて」という、「思いとる」確信、こういう確かな、誰が何といても動くことのない、不動の信仰ができるというのです。その確信の世界、高い精神の世界まで達すると、その世界ではもう理屈はいらないのです。理屈を起えた世界、けれども正しい理屈を通せば通る世界なのですが、そこまで私たちが到達すると、さまざまの疑いは全く消えうせて、阿弥陀仏のお救いが信ぜられ、必ず阿弥陀仏がましまして、この私をお浄土に住生せしめられるという、しっかりとした信念ができあがり、何も説明はいらなくなるのです。だから法然上人は、まず申せたただ申せと仰せになるのです。これが法然上人の教えの「行門為本」といわれる非常に大事なところですよ。

仏教には非常に多くの修行があります。その中で大事な修行は戒定慧の三学です。戒とは善いことをし悪いことを止める修行、定とは散り乱れる心をおちつけまとめる修行、慧とはものの道理を見極める修行をいうのですが、これらは大変むずかしい修行であり、なかなかなしとげられるものではありません。法然上人はそういう私であることを反省されて、

自分のような凡夫ではとてもこのような修行をすることはできない。この三学の他に救われる道はないか、仏教があらゆる人々を救うものであるならば、このような凡夫の私でも救われる道があるに相違ないと思われ、遍く人々にたずね、深く經典を探って、遂に善導大師の「観経疏」によって、お念仏の教えに至りつかれたのです。ですから三学の修行でなくともお念仏だけで救われる、しかもその念仏は観念の念仏でなくて、称名の念仏によって救われるという確信をえられたのです。何故救われるか。阿弥陀さまはこのような凡夫を救おうとしてご本願をたてられたのであるから、その誓いのままにお念仏を申せば、間違いなく阿弥陀さまのみ心になつて、往生することができると思い定められたのです。時に法然上人は四十三才でありましたが、これがすなわち浄土宗の開宗であります。こうして阿弥陀さまが遙かな遠い昔より、私のために用意されておったという大きな感激の中に、凡夫救済の大道が明らかにされ、八十才までの間、この念仏を自ら称え、人々にもすすめられるというご生涯を送られることになったのです。

かくして法然上人は、唯お念仏だけを称えていけば、間違いなく人生の苦しみをのりこえることができる、思いとる決定心が大事であると強調されています。私たちは何事をす

る時にも、自分がしていることが間違いなく達成できるとい
う望みのある時には、たとえそのことがどんなに苦しいこと
であっても、心励み、そのことにうちこめるものです。困難
をのりこえる力が、自然と湧いてまいりますと、その中に大
きな喜びさえも出てまいります。

人生の道はけわしいものです。「越えなんと思ひし峯に來
てみれば、なほ行く先は山路なりけり」という歌があります
が、このような人生の道を歩んでいく私たち、そしてその最
後は死です。死を克服しなければならぬことになります。
浄土の教えはこの死を契機として、阿弥陀さまの浄土に生れ
かわるということを教えるのです。しかもその生れかわると
いう確信ができれば、その時からこの苦しみの世界が、その
確信の中に喜びの世界へ変ることができて、苦しみの中に喜
びが感じられる精神の世界が開かれるのです。

「疑ひなく、住生するぞと思ひとて」念仏申していくう
ちに、必ず阿弥陀さまのお救いにあずかるという心が決つて
まいりますと、その中から人生のけわしい道をのりこえると
ころの大きな力が湧き起ってくるのです。浄土の教えは、死
してのちの教え、未来住生の教えであるという点のみをとら
えてはなりません。未来住生まちがいなしという確信の底か
ら、今日の生活の意義というものを見極める道が開けてく

る、苦しみ悩み多い人生をのりこえていく大きな力が、お念
仏を申す中からできあがっていく、「思ひとる」という心の中
に広くて大きな世界ができあがっていくのです。法然上人の
教えはそういう教えであると理解していただきたいと思いま
す。明日をめがけて今日励むところに本当の人生が開けると
いうことです。したがって浄土の教えが、ただ現実を否定す
るものではない、その否定を超えたところの高い立場から、
もう一度人生を肯定しようとするものであることを忘れられ
てはこまります。それが「思ひとる」というところに帰着さ
れているのです。

・ ・ ・

それでは次に重要な文は、

「たとひ一代の法をよくよく学すとも、一文不知の愚鈍の
身になして、尼入道の無智のともがらに同うして、智者の
ふるまひをせずしてただ一向に念仏すべし。」

というところです。時間があまりありませんので究極的にい
いますならば、学問も知恵も結局は私の人生の問題を解決し
つくすものではないということです。

何故でしょうか。人間の力には限りがあるからです。たと
いお釈迦さまで一代にわたって説きつくされたところの教え
を学びとつても、私の方に限界がある、たといどのような戒

定慧の修行に励んだとしても、この私は罪惡・乱想・愚痴の私であるから、お釈迦さまの悟られた理法を悟るところまでとてもおぼつかない。究極的には學問も知恵も私を救う道、人生の苦しみをのりこえる道ではないといわれるのです。いや、かえって學問をふりかざし、知恵があると高ぶるところに、小さな自分だけに閉じこもる世界が出て来て、大きな仏の世界に目が開かれて来ないのです。たとい學問が深くとも、たとい知恵が深くとも、その學問や知恵をかなぐり捨て、身を投げ出して、み仏の前にぬかずいた時にこそ、初めてみ仏の大きなお慈悲の世界にこの私が包みこまれることができるのです。お念仏を申してひたすらにみ仏の慈悲にあずかるためには、愚鈍の身にかえってこそ、そこに私にとって最も大事な道、人生の問題を解決することができる道が開けるといっているのであります。

小さな自己に閉じこもるところには、自らの救われる道は出てこない、自らの全てをかなぐり捨てて、南無阿彌陀仏と称えるところに、新しい人生がよみがえってくるということ。仏のみ前にぬかずいた時、どのような學者、知恵者といえども、一文不知の愚鈍の者と変りがないのです。そして一文不知の愚鈍の身になった時に、阿彌陀さまの大きなお慈悲に包まれて、新しい自分というものがよみがえるのです。

それが即ち淨土往生につながるということに外ならないということを知って頂きたいと思ひます。

科學が進歩し文化が発展し続けている今日、この社會において私たちは果してこの科學文化を自分のものとして生かしているでしょうか。これ一口私たちの心次第だと思ひます。どのように科學文化が榮えても、私たちの心が貧しかったならば、このようになすぐれた科學文化は私たちのものとなることができません。そこで大事なことは、やはり宗教の世界にひいて信仰を得るということです。お念仏を申してひたすら阿彌陀さまにおすがりしていけば、私たちの全生活を支える確信が持て、そこに新しい人生が開け、そこにこそ科學が生き文化がものをいうところの私たちの本当の人生が開けるということ。を、「智者のふるまひをせずして」といふ法然上人のご文の中に味わっていかねばならないと思ひます。

法然上人は千二百十二年、今から七百六十年前におなくなりになったのではあるけれども、そういう意味においてこの「一枚起請文」が現在もなお、生き生きとして私たちを導く大きな力であるということ。最後に申しそえておきたいと思ひます。

(終)

本来仏教には他の宗教の如く、祈りはないことになっております。従って私達の信ずる浄土宗においても御祈禱のような宗教活動は、原則としてないのであります。

勿論私もその一人でありまして、困った時、行きづまった時には或いは御祈りに近い行為をしたかも知りませんが、大体において中年以後順調だったので、お祈りをした記憶はありません。若い頃、行きづまった、煩悶したことはあったように思いますが、お祈りをしたことはないと思っております。もしあったとしても祈りではなくお願い程度であったのではないかと思えます。祈りとはその行為によってその求める結果を期待いたしますが、願いは単なる願い、ささやかな願望であり、不純な結果を待つことではないのであります。

さて、お念仏に現当二世（現在と未来）の利益がありといわれますが、この利益は祈りの利益でなく、洗濯をしたら手がきれいになったような利益であります。これについて私の経験した一、二の事実について述べさせていただきます。

十余年も前の夜汽車にて東京の会合に発つ日、京都大本山百万遍知恩寺に於て私が二席お話をすることになっていました。第一席の話が終って暫らく休憩に入った時、「お宅からすぐに電話するように」とのこと。電話してみると、息子が孫をスクターの前に乗せて走っている時、横から来た夕刊配

お念仏の 現世利益



—京都市西賀茂西方寺住職—

川内知光

りの新聞社のトラックにはねられ親子共にケガをし、殊に孫の規子は済世病院に入院し、失明の虞があるとのこと。早速にも駆けつけたのですが、私の話を聞くために沢山の人が来て下さっているので左様もならず、あと予定の如く講話を終って講師室に戻ってから、執事長さんに「私のあとの話は先の話と何か違った点がありませんでしたか」と聞いてみました。

「前後席とも別に変った点はなかったと思います」とのこと

と。「実は子供と孫が交通事故にあいましたので、すぐに帰らせて頂きたいのですが、早速ハイヤーを呼んで頂けませんか」と御願ひした頃から、私の心は不安と心配で乱れに乱れて、いてもたってもいられない苦しい状態でありました。息子はたいしたことはないというが後遺症でも残りはしないだろうか？ 孫は女の子故、若し盲目にでもなったらどうなるのだろうか。親の心の欲か、いらいらして筆にも口にも表わせない、あわれな悲しい有様になってしまいました。

「車が来ました」の声に立ち上って、自動車の席に坐ったとたんに、思わずお念仏が出ました。今迄にない真険な南無阿弥陀仏であったと思います。祈りではなかったと思います。純粹の希念であった筈です。酬いられる欲望からでなく、子の親にすぎる清浄な氣持からだったと思います。

車はまっしぐらに病院の方向、西に向って進んでいます。お念仏を申しましたところ、胸の中のかたまり、暗雲がすつと消え失せて晴やかな姿になったのです。「助かる、大丈夫」と私は確信し、息子のこと、孫のこと何一つ思わなくなりました。それよりも東京における重大な会議の内容について考えるようになりました。車は病院の前に止りました。既に診察時間は過ぎ、玄関には煌々とあかりこそついています。下足番のおばさんも居らず、受付には誰もおりません。病室

は一階から四階まであるのですが、私は確かな足どりで誰にも病室を聞かずに二階に上って行きました。

私の耳に孫の泣き声が聞えてくるではありませんか。その聞えた病室に入ると顔上半分に繃帯を巻いた規子がお婆ちゃんに抱かれています。規子は泣いていなかったのに泣き声が私の耳に病室を教えるが如く聞えたのです。私の声を聞いた孫は、私にすがりつくようにして「お爺ちゃん」といって泣き出しました。「折よく宿直の先生が眼科の先生だったのでよく見て頂きましたが、失明の虞がある、二三日経過をみないとはいえませんが……失明するようだと良い方の右眼が犯されるから、直ちに左眼を取ってしまったといけない」とのことでした。私は自信をもって「表面の傷あとは残るかも知れないが失明はしないよ、安心してよろしい」と断言し、予定通り夜行にて上京して会議に臨みました。

私の靈感通り孫は二日の入院にて、あとは傷あとの処理のため通院すればよいことになりました。

今一つ、二年前の三月十九日お参りの人で相当忙しい彼岸の入りの日のことです。私が藍綬褒章を頂き、檀信徒の方々が寺で祝賀会を開いて下さった時の記念品料が十数万円ありました。これは自分が西方寺に安住できたから頂けたのだから、決して私すべきでないと思い、かねて欲しいと思ってい

た開山慈覺大師像を仏師に頼んでおいたのです。丁度その日に出来上ったのです。それと前後して見知らぬ娘さんが「母が長年病気で思わしくありません。東京の大学にいる姉が西方寺の和尚さんにおがんで貰うように言ってきました。これは些少ですが一週間の御祈禱をお願いいたします」とのこと。私は前に申しました如く祈禱を信ずるものでなく、従って行なったことも頼まれたことはありません。返事に困りましたが、お断りするのにも娘さん達の心情を考えるとそれもならず、結局引受けた状態になってしまいました。

お参りの人もなくなった夕方、勤行にはお迎えした慈覺大師像があり、頼まれた病氣平癒のよねさんのこともあり、その覚悟にておつとめをいたしました。光明遍照の文からいつもより声高らかに、長時間お念仏を称えました。声はいよいよ昂ぶりますと、御本尊様、慈覺大師様のお姿がだんだんとはっきりしてくるではありませんか。しかも胸中が前の自動車の中のお念仏を称えた時と同じような状態になりました。「よねさんは助かるぞ」と感じました。

それから一週間した二十六日、檀家のY家におまいりに行った折、奥さんは「姉が色々お世話になり有難うございます。お陰様にて近頃は便所も自分で行けるようになり、皆の者は和尚さんのお陰と喜んでいます」とのこと。Y夫人はよ

ねさんの妹だったのです。

然らば私は病氣平癒の祈禱師になりうるか。なるほど前記の二例（まだ他に数件ありますが）は念仏の力にて奇蹟に近い成果をあげることができましたが、この事が百発百中できるかといえ、決して左様は行かないと思うのです。新興宗教だの祈禱等の連中も決して百発百中ではない筈です。しかし百発百中なる如く宣伝して礼金を頂いている以上、自己自身をあざむいている。いわば欺偽行為であると思うのであります。近くのある祈禱師は「御祈禱で直してあげますが、お医者さんにはかかっておきなさい」と言っています。これなら誰でもやれることです。その祈禱師の妻君は薬ビンを持って医者通いをしております。

お念仏には必ず現世の御利益がありますことは私が体験済みであります。しかし念仏は祈りではありません。大慈悲の阿弥陀仏に対する我等凡夫のささやかな願いにすぎないのです。親に対する願いに等しいものです。念仏を申すことによつて何物を得ようとすることは不能であり、逆に罪惡であります。

純一無雜のお念仏、これが浄土宗徒の最高にして最後の正行であります。



ありがたのお経

× × ×

めでたいお経

無量寿という語は、漢訳された語で、その原名はアミダであります。ですから無量寿経といってもそれはアミダ経のことであり、また阿弥陀経は逆にいえば、無量寿経であります。観無量寿経も、いい換えれば観アミダ経であり、あるいはアミダ観経であります。

大経、小経というのも、アミダの大経であり、アミダの小経であります。

法然上人が浄土の三部経を制定くださったのは、いうなれば『アミダ三部の経』のご制定であります。浄土三部経を貫ぬくものこそ、じつに阿弥陀の三字にほかなりません。訳していえば無量寿の三字にほかなりません。浄土の三部経こそ、じつに『無量寿の三部経』であって、これほどめでたいことはありません。

須藤 隆 仙

(函館・教学研究会)

仏教には、いろいろの三部経があります。『法華の三部』『大日の三部』『鎮護国家の三部』『弥勒の三部』など、さまざまあります。しかしその中で『無量寿の三部』ほどめでたいものはありますまい。三部の真髓を『無量寿』で貫ぬいているということこそ、最上のめでたさだと思っております。

三部ということとは、仏教だけのものでもありません。神道のほうにも『三部本書』というものがあつて、旧事記・古事記・日本書紀の三部を数えております。ただしこれは、仏教の三部経からヒントを得たものだといわれております。この神道の三部は、わが国古代の事跡を記したものを三部選んだわけですが、それは過去の事歴であつても、遠く無量寿のことには及んでおりません。

音楽にも三部曲というのがあり、文学作品にも三部作（ツリロジ）というのがあります。たとえば有名なダンテの『神曲』などは、『地獄篇』『煉獄篇』『天国篇』の三つからなる、いわゆる三部作であります。三部に分かれておりながら、互いに主題があり関連しているわけでもあります。しかし、その三部を貫ぬくものが「無量寿」であるという点においては、とても浄土の三部にかなうものはないでありますしう。

真宗の盛んな北陸地方や、浄土宗の盛んな中部地方では、浄土の三部経を『三部経さま』と呼んで、たいへん大切に、尊信しております。これらの地方では『三部経さま』といえはイコール『浄土の三部経』のことで、いわば浄土の三部経が、諸種の三部経のなかで、代表的の存在なのであります。

さて、浄土の三部経の中で、小経といわれる『阿弥陀経』は、これまた『無問自説の経』といわれて、たいへん特色のある、ありがたいお経とされております。

無問というのは読んで字のごとく、「問う人がない」誰も問わない、というので無問です。自説は「自から説く」で、お釈迦さまご自身のほうから説かれたということ、つまり無問自説とは、誰も質問する人がないのに、お釈迦さまご自身

のほうから、自発的にお説きになられたお経、とこういうことになるのであります。そしてまた、このようにお釈迦さまご自身で、説くべき必要を感じになられて、説かれたお経を『随自意の法門』ともいっております。随自意とは、自意に随がう、釈尊のみ心のままに説かれる。ということ、それこそ釈尊のご本意でありますから、いかに大切な法門であるかが、よくわかるのであります。

さてそれでは、お釈迦さまはいったい、どのような必要があつて、この経をお説きになられたのかといえますと、とくにこのお経のなかでは、『舍利弗よ、舍利弗よ』といって、上首（長老）の弟子である舍利弗尊者の名を三十六回もお呼びになられて、いうなれば、もっぱら舍利弗尊者にのみ向つて、説法をされておられるのであります。この経を説かれたとき、聴衆は「大比丘衆千二百五十人」などといわれて、ずいぶんたくさんおられたのですが、ひとり舍利弗尊者にのみ多く呼びかけられて、この経を説いておられるのであります。つまりこの経を説く必要は、舍利弗尊者のためにこそあつたということが、わかるのであります。

さてそれでは、なんのために舍利弗尊者にのみ、その必要を感じになられたかと申しますと、それは、尊者の伝記を調べると、その疑念が解けるのであります。

尊者は、釈尊がこのお経を説かれてから間もなく、死んでいるのであります。お師匠さまであるお釈迦さまよりも早く死んでいるのであります。つまりお釈迦さまは、自分より先に死ぬ弟子・舍利弗の「いのち」を見通されて、それで『舍利弗よ、舍利弗よ』と三十六返も呼びかけられて、この人のためにこそ、死に対する心構えを、懇々とさとされたのであります。仏教者として、死というものに、どのように直面したらよいか、死の問題、死後の問題を、お慈悲にあふれ切って、お説きになられたのであります。

さて舍利弗尊者についてであります。舍利弗というのは、「舍利の子」という意味であります。弗はつというのは子という意味であります。そして舍利というのは、鳥の名であります。この鳥は、インドやビルマ、マレー半島などに棲息し、鳩くらいの大きさで、オレンジ色のくちばしと、黄色の脚をもち、羽毛は黒色で、下頭部に肉垂があり、人間の口まねをする鳥といわれ、いろいろの經典によく出てくる鳥であります。いまインドでは『マイナ』という名で呼んでいるそうです。

昔、インドの摩揭陀国マカダに一人のパラモン僧がすんでおり、このパラモンは議論することがすこぶるじょうずだったため、国王は那羅陀ナラダという一村を与えて遇しておりました。や

がてそのパラモンは女の子をもうけましたが、この女の子の目が舍利鳥の目に似ていたため、「舍利」という鳥の名を、そのまま名まえとしてつけてやりました。女の子・舍利が大きくなったある日、この村に提舎だいしゃと名のるパラモン僧がきて、女の父親と議論し、提舎のほう勝ちしました。父親はそのために村をとられ、提舎がかわって村の所有者となり、女・舍利もまた提舎の妻とさせられたのでした。

そしてこの二人の間に生まれたのが舍利弗でした。この子はほんとうの名を憂波提舎うぱだいしゃと命名されたのでしたが、人々は舍利の子であるというので、本名を呼ばず、舍利弗（舍利の子）と呼んだのであります。

この舍利弗こそ釈尊の弟子となって、長老といわれた、いまここで話の中心になっている舍利弗その人であります。

先きに述べたように、舍利弗はお釈迦さまより早く亡くなりましたが、阿弥陀経は、この人のために説かれたもので、それはまた、大きくいえば、一人舍利弗のみならず、全仏教者の生涯の帰結を示されたものでもありました。

このようにして、阿弥陀経は、この上もなくありがたいお経であり、これを包む三部経まためでたい經典なのであります。「あり難き仏法」とは、このように「ありがたく」このように「めでたい」經典をこそいうのでありましょう。

「小消息」の御法語に学ぶ△▽

一 われらの持つうたがいとみ仏の大悲

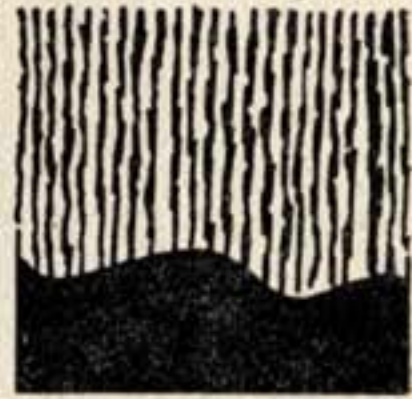
わたくしどもが果してみ仏の救済をいただき、浄土往生ほどの大事が得られるかどうかを反省して、誰しももつ疑問を次に四項ほど挙げ、しかもみ仏の大悲心の前にはまったくその要がなく、みな「疑うべからず」と断言しておられる。

行すくなしとても疑（ふ）べからず、一念十念に足（り）ぬべし。

第一には修行の不足によるうたがいである。いかにもわたくしどもの修行のいたらぬということである。浄土往生のためにはできるかぎり多くの善行を積み重ねばならぬことも、中国の諸師が教えるところである。お念仏を申す身にもいかにも行すくなく、もつともつと励まねばならぬ思いながら、いつも怠りがちである。これで果して往生ができるかという

不審をもつことである。

この疑いに対して、わずか一声の念仏、十声の念仏で足りるとされる。善導大師は阿弥陀さまが往生の行として誓われた念仏を専修することをすすめられ、その余のさまざまな善行をまじえ修行するものは、かえって浄土の往生はむしろかといとされた。阿弥陀さまが法蔵菩薩ほうそうぼさつとして修行に立たれたとき、衆生救済のために願をおこし、特にその第十八願に浄土往生の行を誓われて『無量寿経』の願文には「乃至十念」といい、その願成就の文には「乃至一念」とあり、また『観無量寿経』には、一生悪業を重ねた人が、なお且つ善知識におしえられて臨終に発心し、十声仏のみ名を称えて滅罪往生すると説かれている。大師の師道綽禪師はすでにこの両経にふかく注意されており、大師はゆえに強い信念をもって、かの願文の「乃至十念」とは、生涯をつくして称名念仏を相続す



—大正大学教授—

小 沢 勇 貫

るものから臨終十声一声のものまで、すべてを撰するものと解釈され、すなわち『往生礼讃』、『観念法門』等に第十八願を取意文されたのである。いま「一念十念に足りぬべし」といわれたのは、明かにこれらの経文釈文にもとずかれたものであるが、上人はみ仏の本願にとくに念仏が選ばれ誓われたことに、絶対の功德を見、また平等の大悲を体認されたのである。み仏の誓いを絶対として一念十念に足りると断ぜられたのである。

罪人なりとても疑(ふ)べからず、罪根ふかきをもきはじとの給へり。

第二には罪重い身であることから持つうたがいである。しかしながらたとい罪人であろうとも往生をうたがうことを要しない。法照禪師の『五会法事讃』には「破戒のものも罪根ふかきものもえらび捨てたまわず」といわれている。わたくしどものもろもろの悪業の根元は、むさぼり、腹だつ心、おろかさのいわゆる三毒である。これがはかりない過去世から積みかさねられ、根ぶかいものとされる。こうした宗教的反省は私どもが朝夕となえる「我昔所造諸悪業」等のさんげ文にもよくあらわれている。み仏の大悲はすべてを包擁してありますところがない。心の善悪、罪の浅深もへだたるところではない。『観無量寿経』には罪業の重い下品の三人が、仏の

来迎をいただいて浄土に往生することが説かれてあり、善導大師は経の精神を汲んで、「み仏の大悲は苦惱多きものにこそ格別に加えられねばならない。罪過のどろ海にしずむ人びとを偏えにあわれんで浄土に帰入するようおすすめるのである。水におぼれたものは、ぜひとも急に救うことを要するからである」と解明されている。

かようにいえばとて、み仏の大悲にあまえ、それにつけ上り、あるいは罪業はさわりとならずとして造悪をおそれぬ邪見におちいり、本願ぼこり・悪無過などといわれるやからは、もとより仏のみ心にならず、往生を失うものとなるであらう。向阿上人の『帰命本願鈔』にも「本願にほこりて罪を心やすくおもはん」ものを戒めておられる。ふかく慚愧してみ仏の大悲にまかせてこそ、お救いをいただけるものである。

時くだれりとても疑(ふ)べからず法滅以後の衆生猶もて往生すべし、況(や)近來をや。

第三には釈尊の時代とは遠くへだたった末法の今日では、浄土往生いかかとの疑いである。しかしかような疑いをいだく要はない。『無量寿経』には、末法一万年を過ぎたとき、余のおしえがすべて滅びても、この教えのみひとり百年の後にとどめると、念仏のおしえが永遠の大道であることを明さ

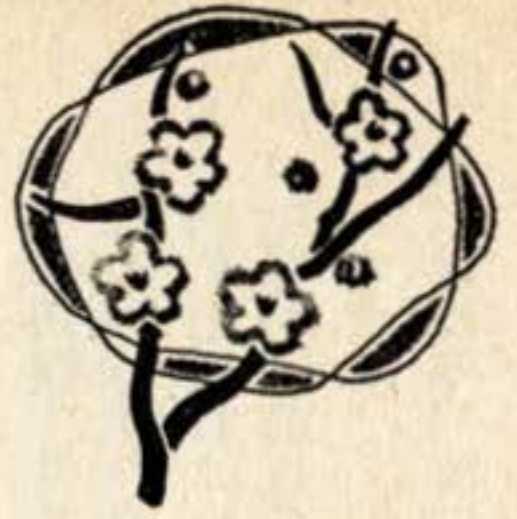
れている。ましてや末法に入ったとしてもまだ年が浅い今日、念仏者の往生は必然のことである。中国では南北朝の末隋の時代、日本では平安朝の末永承の頃を中心として、破仏の法難や動乱の世相の中に末法の意識がたかまり、三階教さんがいきょうの信行しんぎやう禪師、浄土教の祖師道綽禪師は、ともにそのような時代にあつて新たな信仰を開いた先覚者である。末法の時代にこそ社会とともに救われる浄土のおしえが興起しなければならぬ。法然上人も道綽善導ら祖師の主張をうけつぎ、時代とまた人間性をも深くかんがえられて浄土の一宗を別立されたのである。

わが身わろしとても疑（ふ）べからず自身は是（れ）煩惱具足ぼんのうぐそくせる凡夫なりとの給へり。

第四にはわが身の悪きことから持つたがいである。第二の不審と異ならないようであるが、先には罪人であつてはみ仏の清浄な世界には往生できないという疑いに対し、み仏の大悲心から見て決して捨てたもうことなきをいい、ここでは自らの姿がいかにもぼんのうしげき身であるという自省から来る疑心である。浄土宗では信心のもち方あり方、すなわち安心あんじんを説く場合、三心といつてまことの心、深く信ずる心、往生をねがう心の三つをあげる。その中心ともなるのは第二の深く信ずる心である。何を信じ、いかに信ずるかといえ

ば、善導大師は一には機を信じ、二には法を信ずる、二種の信相を説かれている。「煩惱具足せる凡夫」とは、『往生礼讃』前序に機を信ずることを説かれた中のお言葉である。自分のありのままの姿、ぼんのうにみちみちてうかぶ瀬なき身であることを反省するのが、機の深信である。大師でさえ「自らはあらゆるぼんのうを残らずなくそなえた凡夫であつて善根うすくはてしなく過去世から迷いの流転をかさね、未来いつまでも焰ほのおにつつまれた家に居つて苦しみをのがれるすべがない」と述べておられる。仏教の諸宗ではぼんのうを断滅するため長時のきびしい修行をおしえるのであるが、自らの内生活を反省するとき、何人も煩惱具足、罪惡の凡夫であることを否定し得ないであらう。このような機の深信があつてこそ、法の深信、本願を信ずることが決定のものとなるのである。

以上修行の不足と、罪人なることと、時が末法に入っていること、わが身の悪きことによる四つの不審をあげ、いずれも「疑うべからず」と末代のわれらが、このまま浄土往生の機であることを、ねんごろに教えられたもので、四項みな機の深信を説かれたものと申してよい。次には法の深信が説かれる。



《念仏生活》

第二回

—五重相伝のお話し—

藤井 実 応

初重 往生記

法然上人作

正 説 分

(一) 機ということ

五重相伝の最初の教えであるから初重といい、法然上人の『往生記』の教えを先ず心得るのであります。入信の第一歩、修道の門であります。相伝の上でこのみ教えをまとめて「機」と習い伝えて、まず自己というものを正しくみつめること、自己を反省し、脚下を照顧すること、が、仏法に入る門戸であり、念仏の信を頂くための一大事肝要であることを示されたのであります。機という

のは、機類、機根などと熟して、即ち人間自身のことです。仏教はすべて、人間はみな仏性がある、理想実現の万能性を有し、みな仏道に帰入することができると説きます。その意味で仏教に帰入した人も、これから帰入する人も、すべて機と申します。人間誰でも仏性（めざめゆくはたらき）はあるが、しかし現実の自身は如何でありますでしょうか。ありのままに自己を反省することであります。

往生記という書物は、『往生記』という表題はないので、何ら理くつばったことは記されておらず、最初から往生の出来がたい人や、念仏して往生のできる人々の相^{すがた}を並べて述べてありますから、この書を『往生記』と申しているのです。いろいろな人を並べ挙げられたのは、これを一つの鏡として、自己自身をよくふりかえ

りみよと教えられるのであります。

(二) 往生ということ

往生ということは、死ぬことや、困ったことでは無論ありません。文字どおり、往き生きることであります。煩い悩み迷いの多いこの現実世界を離れて、永遠なるまことの浄らかな世界に生きゆくことで、極楽に往生することが私共の願ひであります。極楽浄土とはその永遠にして真実なる覚醒の世界であります。永く心身の苦悩を離れた無上涅槃の仏の妙境界であります。その極楽浄土に往き生きることを往生と申すのであります。

(三) 往生記の梗概

さてこの往生記に説かれてあることは、次の五つの事項に分けてみるができます。

第一に難遂往生の機、と申して、往生しがたい人を十三人あげてありますが、その中の二、三だけあげてみると、念仏を励むけれど慢心のため魔障をうる人(1)、信心が一ならず決定せざる人(6)、好んで雑縁に近づく人(9)などがあります。

第二に四障、前に往生しがたい人をあげましたが、こ

れを総括して往生の障りになるものが四つあります。(1)疑心(これが迷いのもとである)、(2)懈怠(なまけのこと、怠りは死の道)、(3)自力(何でも己の力でやったと執われていること)、(4)高慢(傲慢の人は念仏の信に入り難いと経にも説かれている)。

第三に四機、これは後に種々念仏往生の機として二十人挙げておられるが、それら往生のできる人を総括して四機と示されたのです。(1)信心(涅槃の城――極楽)――は信を以て能く入ると法然上人は選択集にも述べられている)、(2)精進(精進即仏教、はげみこそ不死の道)、(3)他力(何事もおかげとうけとること、往生のできるのも阿弥陀仏の本願による、本願即他力である)、(4)卑下(けんそん)。

第四に種々念仏往生の機として五類二十六人あげてあります。

- (1)智行兼備して念仏往生する機(この中三人あり)
- (2)義解念仏往生の機(この中三人あり)
- (3)持戒念仏往生の機(この中二人あり)
- (4)破戒念仏往生の機(この中二人あり)

(以上の四機十人は今の所詮でないから、一々これを挙げません)

(5)愚鈍念仏往生の機——此の中に十六人があげてありますが、その中に、

一には善知識の教を聞いて、一向に信を生じ、威儀法則を弁^{わきま}えず、行往坐臥を論ぜず、日夜に念仏し、久しく其功を積み往生する人。

等があげてありますが、この愚鈍念仏往生の機根こそ本願の正機であります。阿弥陀仏の本願(みほとけの根本の願い)は十方の一切衆生を悉く極楽涅槃の世界に往生せしめんと願われているのですが、そのお慈悲の本願は、この愚鈍念仏者こそ第一の正機とせられるので、智行兼備して念仏往生するの機等は第二の機であると聖阿闍梨師も申されています。

自己自身をよく反省してみると、善を修しようとして善を修することができず、悪を為すまいと願いながら思わず悪を為してしまう私、わずか一つの条件で死に直面せねばならぬはかない命の私、生活上いろいろの事に出合うて常に煩い悩んでいる私、人生のこと、世界のこと

分っているつもりでいるが、よくよく深くたち入って考えてみると何一つ分っていない愚かな私、これが現実の私であると気づかされます。この無力な愚かな私が、阿弥陀仏の御慈悲の結晶たる本願力によって、そのみ名を称うるばかりにて、只今から如来の光明の摂化(お守りを頂き、お導き下さる)を蒙り、未来永遠のお救いを頂けると信じて、このほかに何の疑いもなく、思いはかることもなく、知恵もなく、愚かのまま、只仰いで往生(真実世界に生きゆく)を願い、平に信じて、み名を称え、念仏裡に生活する。これが愚鈍念仏第一の機と申すのです。たとい仏教の大学者も、「智者のふるまいせず、一文不知の愚鈍の身になして、只一向に念仏」せよと元祖さまの御遺訓にもあります。また「聖道門の意は智慧を極めて生死を出で、浄土門の意は愚痴に還って往生す」とも説かれ、「十悪の法然房愚痴の法然房が念仏して往生せんというなり」と申された。その愚痴にかえるというのは、何も学んだことを忘れよとか、馬鹿になれというのではない、如何ほどの智者学者でも、絶対なる阿弥陀仏の摂化を頼む自身は、一文不知の愚鈍者と同

座、同列、何らかわるところはない、それ故知恵や學問をものだてず、才覚や知能を加えず、ただ本願を信じて一すじに念仏申す、それが愚痴にかえるということです。自分の現実のありのままのすがた、相對有限の無力な愚かな私、このような私はただ善知識の教えにしたがい、絶對なる阿彌陀仏の本願を平に信じて念仏を称うるばかり、これが愚鈍念仏の機、單直大信のすがたであり、しかもこれが涅槃の城みやこ（極樂淨土）に至る直線道であります。

第五、初重奥書、初重のしめくりとして巻尾に小消息（黒田の聖人つかわすお文）があります。一枚起請文と共に淨土宗の二大法語として朝夕読誦しているありがたい法語です。

「末代の衆生を往生極樂の機にあててみるに……信じてもお信すべきは必得往生の文なり」とあって、末代（現代）に生きうけている私自身が、如何にして眞實の生活を全うすることができるか、如何にして阿彌陀仏の淨土に生きゆくことができるか、それには先ず自身（機）を省み、私如き者も念仏だに申せば阿彌陀仏の本願によ

って必ず往生できると信じて申せとのお示しであります。信の一字こそ最も大切であることを肝に銘ずべきであります。

四 初重の要旨

初重は要するに、み教えを通して自己自身（機）をよくよく反省し、このような愚かなものも念仏すれば阿彌陀仏の本願により必ずその淨土に往生できる、即ち現在より未來永遠のお救いを頂けると信ずることです。

二重 末代念仏授手印

聖光上人作

初めに伝分

先ず淨土宗二祖聖光上人の略伝を申上げ、後に二重の興起を演べます。

聖光上人（一一六一～一二三八）、諱いみなは弁長、後に弁阿と号しておられます。仁孝天皇（一八〇〇～一八四六）

は大紹正宗国師と勅諡せられました。筑前香月庄の人は大紹正宗国師と勅諡せられました。筑前香月庄の人の誕生地は現在、北九州市八幡区香月、吉祥寺となつてゐる。姓は香月氏、十四才剃髪、天台宗を学ばれた。二十二才寿永二年（一一八三）春、叡山に登り觀叡法橋の室に入り、後宝池房真法印に就き天台の奥義を究められた。二十九才建久元年（一一九〇）郷里に帰り、解行の譽高く、油山の學頭に補せられた。三十二の年、世間の無常を悟り、無上道心を發し念仏（天台宗の）行者となられた。その後同国飯塚明星寺に五重の塔を建立し、その本尊を迎えるために京都に上り、仏師康慶の離れ家に逗留（四條寺町聖光寺はその古趾）、この時宗祖大師念仏の弘通盛なるを聞き、昔、証真法印が屢々法然上人の智徳を讃歎せられしことを思い出し、結縁してお目にかかりたいと吉水の禪室に上人を訪ねられることになったのです。時に建久九年（一一九七）五月、法然上人六十才、聖光上人は三十六才でありました。この出会いこそ聖光上人の生涯の方向が転回され、やがて浄土宗の二祖として宗祖大師の真意をうけついで鎮西（九州）を中心に念仏を弘められる因となつた尊い出あいであつたの

であります。法然上人は念仏を三重に分別し悉くその義を説かれた。文義広博、智慧深遠、昼より夜に入り、十時間不休の説法に先の高峯の心は全く消え、渴仰の思いは深く、弟子の礼をとられて、それより法然上人に事えて、更に勉学修行すること首尾八年、一宗の深奥を極められました。聖光上人は「わが大師釈尊はただ法然上人なり」と常に讃仰されていました。法然上人も聖光こそ実に伝灯の法器であるとおよろこびになり、建久九年（一一九八）には選撰本願念仏集二巻を授けられ「汝は法器である。伝持弘通するの人である。早く一本をうつして末代に弘めなさい」と申されました。その後法門を残りなく相伝せられ、元久元年（一二〇四）大師の許を辭して鎮西に帰り、久留米の善導寺（大本山）を中心に念仏の一行を興隆せられることになりました。宗祖の滅後十七年、二祖六十七才の安貞二年（一二二八）十一月、末代念仏授受印一巻を製作し、詳かに宗祖大師面授相伝の正義を筆録せられたのであります。七十六才の嘉禎三年（一二三七）八月一日、三祖然阿良忠上人に伝灯の血脈を付屬せられ、翌四年七十七才でご入滅されたのであります。



川 上 法 俊

(東京都文京区在住)

地蔵さまの頭は何故円い〈下〉

うも現存しないらしいのですが、蓮華三昧經というような地藏本地弥陀を述べるお経もあったらしく、増上寺の地藏講式にも述べられています。無論本文は引用されていませんが。

二十五菩薩来迎式のご存知ですね。

これは十往生經という經に則った来迎の儀式ですが、この中にはお地藏さまがいませんね。何故でしょう。観音さまと同じに誰でも救おうとするお地藏さま、阿弥陀さまや観音さまと同じだとせられ、浄土宗の庭にも沢山いられるお地藏さまが何故出てこないのでしょうか。

善導さんの観經疏に九品往生のことが説明してありますが、上品往生の人々には無論本当の阿弥陀観音勢至等のお迎えで、下品は中迄は化仏化菩薩の来迎があり、下々品だけが金蓮華だけのお迎えです。下より良い筈の作品は阿弥陀さまの来迎でありながら、観音勢至のような菩薩衆の化菩薩は来迎されず、阿弥陀さまの御供は浄土の声聞衆、即ち比丘衆ばかりです。そのわけは上品の人々は本当の大乗の人々、下品の人々は大乗でなければ救われ難い人々、中品の人々は善人ではあっても小乗仏教からやっと転向したばかりの人々（小乗教ではいいません）で、その余習のた

第三の事は、これは浄土教の人々と関係もあることで、知っていないと何かの時に迷いが出ないものでもありません。先にお地藏さまは一仏より一仏迄、無仏の時代に苦の衆生を生天させると申しましたが、これは御自身に定まった浄土のないことも大きに関係あることだと思います。観音さまは前述の如く、娑婆世界をも手伝われますが、本国は西方浄土ですから有縁衆生はそちらに導びかれます。お地藏さまはそれが無いのです。

鎌倉時代の信仰には沙石集の如く弥陀地藏一体、地藏本地弥陀というような信仰、長谷観音の如く弥陀地藏一体の信仰等もあり、ど

めに菩薩の人々の来迎がないのです。ですから観經疏は「すなわち菩薩衆なきことを示す」と説明しています。しかし考えましよう。お地藏さまは菩薩でも比丘相ですから、殊に小乗の人々を庇うことも本願にしているのですから、この来迎の比丘衆の先達にもありそうなものですが、前述の二十五菩薩は他の諸菩薩名で満員です。

凡そ理由を考える時一部分の理屈のみ考えとはいけません。まず根本的な理屈を考え、その上に特殊な条件を考えねばなりません。前述の四誓願で述べたように諸仏菩薩の根本精神は共通ではありますが、衆生機根万差である上、その救済者方の方便誓願も万差となり、各々有縁の仏菩薩の生ずることは当然であります。子供の時父を失って地藏好きになつたらしい沙石集の著者無住沙石はこのようにいつております。

凡そ諸仏菩薩の内証外用を論ずるに内証は皆自性法身毘盧の全体也。外用の諸尊は法王の一官をつかさどり、法界の一門は出で

て本誓悲願別々にして万機を利益し給う。然るに地藏菩薩きつたは闍提せんだいの悲願をおこし本師の付属を受け、無仏の導師として惡趣の利益をさきとし給事諸賢聖にすぐれ給えり。と、要は諸仏諸菩薩有縁の者への分業であり、よし本地問題等あるもその姿を別とせざるべからざる時は混乱せしむるべからずという事であります。

地藏菩薩は先程申しました通り、苦の衆生を天に生れさす迄がお勤めで、それ以上成仏とか往生にはかかりあわれぬのがお誓いなのです。よし本地が弥陀と団体、観音と団体等のことありとも地藏菩薩の姿を取らるる限り、往生成仏には直接タッチはせぬという立前なのです。故に来迎衆にはどうしても入つて来られぬわけであります。

さてそれでは浄土教徒はお地藏さまとはおつきあいせぬ方がよいのでしょうか。そのように考えたならば前述の門徒の人々のようなひねくれた解釈になつてしまいます。まず助行のことに關しての宗祖法然さまの明瞭なお

言葉を拝見しましょう。まず一見排他的な、「念仏はひとり立させてすけささめなり」とあります。次に

「現世をすぐべきようは念仏の申されんかたによりて過ぐべし……自身安隱にして念仏往生をとげむがためにはなにごとみな念仏の助行なり」

「この世のいのりに念仏のほかには念仏をも申し経をよみかみ仏をつくらむは專修をさふる行にては候はず」

「わが心弥陀ほとけの本願に乘じ決定往生の信を取るうえは他の善根に結縁助成せむことはまたまた雜行になるべからず、わが往生の助行となるべきなり」

「何事にもおもひあてがいていのり申すにみなことごとくなかだちとならずという事の候わねば念仏いかにもいかにも信じがたく思わざらん人はまた心のひかむにしたがいていづれの行にてもつとめに従いて極楽に廻向せよと申候也」

以上の如く法然上人の浄土教は決して門徒の如き一概の排他性はありません。他力往生の根本義の問題ともなれば、念仏為先ともな

り、ひとりだちしてすけさすわけには行きませんが、機根万差宿縁万差なる以上、その正助が逆となるならば非であります。正助の明分あり、その往生の心の不動なる限り一概に排斥は却って弥陀の力にも諸仏にも背くではありません。往生を志すにもせよ、種々の宿縁もあり娑婆のみならず他方世界諸仏にも種々因縁義理のある人々も多かるうに、全然勝手な清算の仕方は許されないのでしょう。本誓なる以上一応の往生が許されるとしても、それは下品以外にないでしょう。その不義理性が天竜寺夢窓の罵るところであり、門徒の念仏となり、浄土宗念仏ではなくなるのです。念仏の目的は外道の生天ではあります。還相廻向のためであり、そのためにこそ大乘として許されるのです。自分一個の小乗的往生目的のために周囲に迷惑のみかける如きは許されないのでしょう。

必ず助行を用いよなどとなればとんだ間違いであります。ただ機根万差の故に用うべき人、用うべからざる人、種々あるうというの

みであります。またお地藏さまは亡者供養の特徴があり、他人供養のためなどには更に害なき筈であります。確かに随願往生十方浄土経の如きには西方へも亡者供養の力ありとは述べらるるも、浄土教の本義、弥陀王本願は飽く迄自身称うることが本義であり、亡者供養などは決して本義ではありません。

そのことは沙石集卷二ノ下、徒然草二二二に竹谷浄願房の光明真言及び宝篋印陀羅尼対念仏の亡者供養効果論が弁じられています。浄願房の念仏劣と朝廷にて答えしに不満の弟子が「貴君は浄土宗徒でいながら何故念仏勝と答えなかつたのか」との問に対し、往生のための念仏は信ずるが故に行ずるも亡者供養に關しては終の明文があり、それを歪めて念仏勝とはできないと答えています。

真に天晴れであり、念仏には念仏の良さ、真言には真言の良さがある筈であります。お地藏さまの如きは成仏をも往生をも別願とし

ていません。さりながら子供等のお世話になるというふうなつもりから御義利の時もあるうし、また直接に往生を世話されずとも脱地獄より往生への仲立をたのんで効果のある場合もありましょう。何か現世のことを頼む場合もありましょう。他人のことをたのむ場合もありましょう。いずれも大悲闡提の地藏尊の全然祈って甲斐なきこともなかるうし、またいやしくも菩薩として俺の所へ来たから往生は許せないなどいわれはしないでしょう。ただどこまでもその人の機根宿縁に合不合の問題であり、一般の助業例えば薬師信仰の如きと同じでありましょう。薬師仏は殊に西方往生をも援助せむとのお誓いはありますが。地藏尊として特別な御無礼をせざる限り御援助はあるでしょうし、妨害はあるまいと思われ

ます。
ただ地藏尊の頭は円く、閻魔さまを兼ねる事を時々思い出すことでありましょう。

物	聖
語	典

カピラ城の滅亡(2)



つる た
たん せん

「いいさま、るり王子の臂をつかんで乱暴にお堂の外にひき
づり出し、

「おのれッ、下賤のはした女の小せがれッ！世尊の坐した
まわぬうちに、なぜ先に入って尊い獅子坐を汚したか！」

顔を真っ赤にし、かんかんに怒って力をこめて王子を其の
場になぐり倒しました。

暫くして痛さをこらえてやっと起き上りました王子は、長
い歎息をついていましたが、驚いてその場につけて来た
侍従の好古に、

「おお好古よ、このことをよく覚えておいてくれ、わたし
は、今は力はない、仕返しは出来ない、わたしが王となった
時に、辱しめられた今日のことを申せ！」

堅く握った可憐な二つの拳をさも無念そうにわなわなとう

ちふるわせ、目にいかりの涙をためて告げました。

「よろしうございますとも、王子さまのおっしゃる通りに
いたしまする」

好古は、大きくうなづいて見せました。

釈迦族は、るり王子の坐った獅子坐の床の土を汚されてし
まったといつて堀り去ると、更に新しい土を入れ、獅子坐も
新しくつくりかえてしまいました。

その後、幾年かの間、カピラ城で射術を錬磨していたるり
王子は成年に達しますと、舍衛城へ帰りました。未だ二十才
の青年王子でしたが勇敢で武芸に達していたので、父ハ
シノク王の將軍となり辺境の騒ぎを治めたりして大いに活躍
いたしました。こうしているうちにバンドラ事件が起りました。

ハシノク王が未だ若い頃、古い学問の都、タクシヤシラーに留学しましたが、その時、知り合いました末羅^{まろ}人のバンダラを、その後、王位に即^つきますと自国に迎え次第に優遇し將軍としました。バンダラは多くの武勲を建て名声も上って来ましたが、内心これを心よく思いませんでした王は家臣の讒言を信じて終に殺してしまいました。しかし王は自分のあやまりであつたことを後悔しますと、彼の甥のデーガ、カーラーを取り立てて將軍としました。けれどもデーガ、カーラーは叔父のバンドラが無実の罪で殺されたことを怨み、何とか王に復讐してやろうと心の中に計画していました。この時、国の辺境で、又、騒動が起りました。デーガ、カーラーはこの機会を利用して暴虐なる王子をそそのかして王をなきものにしようと策謀いたしました。この陰謀は輔弼の大臣等も知らないほど、ごく秘密のうちに進められ、王が祇園精舎へお釈迦さまを訪ねられた隙を狙って行われたのでした。

ハシノク王はおしのびで近臣や行雨夫人をつれられ僅かの兵に守られて祇園精舎に行き、お釈迦さまの説法をきかれしました。説法をきき終って王が帰路につかれたとたん、るり王子は沢山な兵を卒いて襲いかかりました。るり王子は辺境の騒動を鎮めるためといって王の兵をくり出し、急にハシノク王を襲つたのでした。全く夢にも思わぬ不意の出来事だった

し、護衛の兵も多くはありませんでしたが、王の兵士はみな死力をつくして勇敢に戦いました。しかし集寡敵せず敗れてしまいました。この危急の場から辛うじてのがれることが出来た王は、マカダ国の阿闍世王^{あじよせ}の救いを求めようとして王舎城へと向いました。阿闍世王の王妃は、ハシノク王の王女、金剛姫であつたからです。

やつと王舎城に着いた時は、既に日は暮れ果ててどの城門も相憎と固く閉ざされていました。がっかりした王は身心のつかれが一時に出て、その上ひどい空腹におそわれ、もう一歩も歩むことさえ出来なくなっていました。這うようにして大根畑に這い入ると、抜きとった生大根をガリガリとかじりました。こうしてやつと飢をしのぐことが出来ましたが、焼きつくような口の渇きにたまりかねあえぎながら池の側にたどりつき、水を吞もうとしましたが疲労のため、そのままその場にかっかりしてしまいました。

翌朝、るり王子返逆の報を受けました阿闍世王は、驚いて大勢の家来たちを手分けしてハシノク王を捜し求めましたが、王は既にこと切れていました。阿闍世王はハシノク王の遺骸^{むくろ}を収めて手厚く葬りましたことはいうまでもありません。

父王を殺逆し自分勝手にほしいままに王位についたるり王

は、先にカピラ城に弓術の勉強に一緒に行った家来たちを、みなそれぞれ重要な官職につけました。

王子の侍従としてカピラ城について行った好古は、或る日、

「王よ、あの時、カピラ城で、釈迦族からひどく罵り辱められたことを覚えていられますか」

とききました。

すると、王は言下に、

「よく、おぼえている。どうしてあの日のことを忘れることが出来ようぞ」

と、顔をくもらせて答えました。

「王よ、あなたは既に王とられました。いよいよ報復される時が来たのでございます。ためろう必要は、いささかもありません。いまこそ、兵馬を起して、あの時の怨を晴らす時でございます。わが軍は今、強うございます。釈迦族はいかに武勇にすぐれていても、国は至って小さく、ひとたりもございますまい。ひとにぎりでございまする」

好古は、王の心を復讐へとかり立てました。

「ううむ、汝等、直ちに國中へ命令を出し、四種の兵（象軍、馬軍、車軍、歩兵軍の四種）を集めよ。わしは軍を率いて、あのにつくき釈迦族を征伐してくれよう」

王位を奪った勢に乗じてる王は、大軍を率いてカピラ城を攻めようと決心しました。かくてカピラ城の平和な夢は、まさに破れようとなりました。

この時、お釈迦さまはコーサラ国の鹿野苑ろくやおんにいらっしゃいました。お弟子たちはるり王が大軍を率いてカピラ城へ攻めよせようとしている噂をききますと驚いてお釈迦さまに、このことを詳しく申しあげました。するとお釈迦さまは、何を思われたのか、るり王の軍隊が必らず通るであろうとお考えになられた道に先き廻りして、道の傍の枯木の下で坐禅されていました。

大軍を率いて攻めのぼって来たる王は、寂しい野原の路端ただにそそり立つ一枚の葉もない枯れた樹木の下で坐禅されているお釈迦のお姿を眺めると、驚きあわてて車を下り、お釈迦さまのおそばに行き、うやうやしくみ足を拝し、

「世尊は、この炎天によく繁った木の下に坐したまわずに、なぜにこのような枯木の下に坐禅されていられまする」とおたづねしました。

このあたりには、濃い緑色のよく繁って天幕のように拡がった涼しい影のある大木もあるのに、なぜわざわざ枯木の下でただお一人で坐禅されているのであらうと、不審に思ったからです。

（つづく）

「おばあちゃん、もう御主人の七回忌ですね」

「早いものです。私ももう耳がさっぱりだめになりましたし、こう冷えますと」

「仏様のお塔婆を、ご供養申しておきましたので、お墓へおたて下さい。お足元に気をつけて下さいよ」

冬のある寒い日の、住職と老婆との会話である。

亡くなった人の追善のために、このような造寺造塔をした話しは古今東西多い。

この塔は弘法さま信仰の中心地、高野山小田原谷にある金剛三昧院の境内にあり、木立の深い背景に経蔵と並んで静寂さをただよわせている。

貞応二年（一二二三）北条政子は夫頼朝と子供実朝の菩提を弔うために、行勇に斡旋され、高野山に金剛三昧院を建てた。その中にこの多宝塔も建てたのである。それで貞応三年九月十八日付の『金剛三昧院文書』をみると、執権であった北条泰時は鎌倉殿の仰せを蒙って、筑前国（福岡県）の粥田庄をその寺領として下知している。また寛元元年（一二四三）八月二十二日付の同文書をみると、それが政子の遺言であったことがわかる。政子にしてみれば、その存続が心配になったのであろう。

政子は嘉禄元年（一二二五）七月十一日に歿し、夫頼

朝は正治元年（一一九九）五十二才、子供実朝は承久元年（一二一九）二十七才で歿した。結局政子は夫や子供に先立たれた。政治的なことはさておき、気性の強かった彼女にも、純粋な気持があったことは認めてやらなければならぬ。

この塔は、所謂東寺の五重塔や薬師寺東塔とは興を異にしている。それは二層造りであることかも知れないが、細かい檼たきぎ、基壇と間斗束の白土、檜皮葺のやわらかさなどから、がっしりした中に清楚さを感じさせている。九つの相輪は石山寺の多宝塔と変りないけれど、裳層は三間に附されている。用材に朱の痕跡があり、当時のきらびやかさをしのばせている。

再三の火災のため、当院に草創当時をしのぶ建物はこの宝塔と経蔵しかない。政子のそうした夫や子供に対する菩提心が、この多宝塔を現存させているのかも知れない。

二月ともなれば雪深い高野である。小田原谷の木立は一女性の切実な気持を、今もなお見守っているよう。

（田中祥雄）



宝物シリーズ

高野山金剛三昧院

多宝塔

「浄土」購読規定

一部 定価 九十円

会費一カ年金一、〇〇〇円

(送料不要)

浄土

二月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和四十五年一月二十五日印刷

昭和四十五年二月一日発行

定価 九十円

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行人 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

振替東京八二一八七番

東京都港区芝公園十九号地の一

浄土宗務支所内

編集室 法然上人鑽仰会

大 正 大 学

東京都豊島区西巣鴨4の530 電話(918)7311

昭和45年度学生募集

募集人員 200名・2,3年若干名 大学院修40名・博13名
カンセリング研究生(10名)

出願期日 第一次1月10日～2月24日
第二次3月3日～3月24日

試験日 第一次2月26・27日 第二次3月26・27日

学 部 専 攻 科

仏教学部 仏教学科—仏教学・梵文学・浄土学・天台学・真言学
文学部 文学科—国文学・米英文学
史学科—日本史学
哲学科—西洋哲学・宗教学・中国学
社会学—社会科学社会事業

大学院文学研究科—仏教学・国文学・宗教学
カンセリング 研究生

男女寄宿舎あり☆詳細は同学庶務課入学案内へ(〒150円封入)

法 蔵 館

京都下京区正面烏丸東
振替京都2743・電話371～0458

新 仏教童話全集

監修 浜田広介・中村 元
編集 花岡大学

全8巻 別巻1

解説付き 菊判・上製本・函入・各¥700
全巻一時払特価¥5900(45年2月末まで)

予約受付中
内容見本呈

特色の二三
全巻の意欲的な執筆により、インド・中国・日本の説話、伝承から取材し、保育現場や家庭の要望にこたえられる心あたたまる画期的全集

幼児には読んで聞かせ、小学生は自分で読んで、大人も読めば、心情がよみがえり、その意味、話がどんな事情で成立したのか、中心的な意味、取扱い方など専門学者の解説

△内容▽ 1 ジャータカ 2 仏典I 3 中国逸話 4 日本逸話 5 ひろすけ幼年童話集 6 逸話I 7 逸話II 8 日本名作別・年中行事既刊・発売中 (毎月一冊二冊ずつ刊行)

1 ジャータカ(月の名人、さるのはなしなど)花岡大学著・6 逸話I(釈迦・法然・良寛など)山本和夫・久保喬他著・別巻 年中行事12ヶ月